



沖縄テレビ報道部副部長

照屋 健吉

一般的に沖縄は資源に乏しい場所と言われている。全体的に隆起珊瑚礁からなる島々は、貴金属や宝石など価値のある鉱物資源とは無縁との先入観があるようだ。しかし、つぶさに調べれば必ずしも資源が不毛の地ではない。かつて明や清国との主要な貿易品目として硫黄島産出の硫黄が輸出されていたし、明治になつては尖閣諸島の開拓に伴い夥しく生息していたアボウドリの羽毛などが欧米に輸出されて好評を博していた。

尖閣諸島の開拓者、古賀辰四郎の報告によれば、最盛期の明治四十四年には羽毛や鳥の剥製、鳥油などで三十八万七千八百四十円の

沖縄の資源を考える

収入を記録している。警察官の月給が二十〜三十円の頃であり、古賀は沖縄県の産業振興の功績により藍綬褒章を下賜されている。

さらに、規模が大きかつたのがラサ島の燐鉱山である。いまでも、東京に本社のある一部上場の化学会社ラサ工業の「八十年史」によれば、最盛期の大正五年には約二百四十二万円の売り上げを記録している。ラサ島は南大東島の南約八十キロに位置する絶海の孤島であるが、約二千人の鉱夫が働いていたこともあり、記録に見る限り、戦前戦後を通じて、沖縄最大の鉱山と言えるだろう。残念ながら、先の戦争で放棄され現在は米軍の射爆場となっている。沖縄で高品位の黄銅鉱で金銀が附随して産出していた鉱山が在ったことは、ほとんど知られていない。ケラマ諸島の屋嘉比島の銅鉱山で、明治初期に尚家が開発に着手したが、

後に沖縄で実績のある前出のラサ工業に譲渡された。記録によれば、鉱脈は概ね良好で東海岸にはかなりの富鉱が発見され、慶良抗と命名されたが米軍の上陸で壊滅した。四件の事例を上げたが、これらの資源は、何れも無人の孤島に存在したことが特徴となっている。

ならば、沖縄本島には資源はないのだろうか。本島では本土復帰の直前あたりから地下の天然ガスが注目されたが、残念ながら期待外れに終わった。沖縄南部の島尻層と呼ばれる地層には天然ガスが含まれ、温泉と共に噴出することが知られている。最近になって温泉の企業化に成功したのが、宜野湾市大山にある「Jアラック」である。宜野湾農協が経営する温泉であるが、地下二千三百メートルから日量二千四百トン、四三度の温泉と約三千六百立方メートルの天然ガスが噴出する能力がある。温泉は同社では使いきれない量であり、隣接するラナカイ・デンホテルの温水プールに供給出来れば、合理的な利用法だと思いがとうだろ。沖縄の標準家庭のガスの使用量は二日当たり二立米程度であるから、Jアラックは約三千六百世帯の熱量を賄える計算である

が、今のところ空しく空中に放散されている。量的にJアラックより多いのが浦添市沢峠の県健康増進センターが、去年二月に掘り当てた温泉である。一千五百六十メートルの地下から五四度の温泉が日量二千六百トン、天然ガス四千立米が噴出する能力がある。県内でこのような温泉が利用されているのは、那覇市西町のロジールホテル、西表島の高那温泉などがある。沖縄の温泉は古代の造山運動で地下に閉じこめられた海水といわれ、最近の研究では南西諸島の全域で産出する可能性が出てきた。これらの事実を総合すると、例えば、千世帯程度の離島を想定した場合、一本の温泉を掘り当てれば、熱水が各家庭に供給出来るだけでなく、随伴する天然ガスは管理費を除けば燃料としてはタダになる。温泉は、冬場のリゾートホテルの温水プールにも利用できる。

この他の資源として、周囲を海に囲まれた沖縄は、今注目の海洋深層水の揚水が比較的容易に出来るという優位性がある。このように見てくると沖縄には利用出来る資源が眠っているのであり、有効に活用される日を待っている。